

ISEM '98 参加記

藤田 健一*

それは平成10年1月23日金曜日のことだった。全ては一本の電話から始まった。

「九州大学の楠田です（工学部建設都市工学教科教授）。できたらでいいんですが、今年の夏にアメリカの国際学会で発表していただけますか。生態系モデルの学会なんです。」

「できたらでいい」と言われても、面と向かって「イヤです」と言う度胸はないし、

「今まで一度も外国に行ったことがないんです。食べ物の好き嫌いが激しいので、外国はちょっと。」

「食べ物ぐらい何とでもなりますよ。」

「それに、英語が全然駄目ですから。」

「英語ができないからといって、殺されやしませんよ。」

「……………」

「詳しいことは、岸先生（北海道大学水産学

部教授）に問い合わせて下さい。」

というわけで、はっきりと断ることのできない、根性なしの自分を恨めしく思いながら、岸先生に mail。

26日（月曜日）、返信が届く。それによると、学会はISEM'98 (International Society for Ecological Modelling 1998, 略称アイセム、アメリカなのになぜかModelingではない)、場所はメリーランド州ボルチモア市、開催期間は8月2日（日）～6日（木）。そして、何と、アブストラクト（当然英文）の締め切りが2月1日。もう1週間もない。とりあえず、とくに急いでいない仕事を放り投げて、これから半年間でできるであろう研究内容と、その成果を想像しながら、日本語のアブストラクトを草稿。そして、田中君や李氏に手伝ってもらって、というよりもほとんど

丸投げで、とにかく英文アブストラクトを作成し、楠田先生に添削を依頼。

31日（土）、やっと落ち着き、仕事の遅れを取り戻すべく田中君とともに休日出勤をしていると、突然、楠田先生登場。ニコニコしな



* (財)九州環境管理協会・環境部システム開発課長

がら、

「休みの日に、仕事なんかしてちゃだめですよ。」

「でも、私がいると思われたから来られたんでしょ?」と、言いたいのを我慢して、

「わざわざありがとうございます。」

と、頭を下げる。アブストラクトは、原文の痕跡を全くとどめないほど書き直されている。内容について、先生とイメージの摺り合わせをし、翌2月1日、締め切りの日にmailで投稿。とにかく、これで一段落。後は査読結果の連絡を待つのみ。

3月25日(水)、「8月にボルチモアでお会いしましょう。」というメッセージが、学会ChairmanのDr. Anthony Kingから到着。これでもう行くしかない。

腹をくくって、とりあえずパスポートを取ったものの、研究は遅々として進まない。「これでも一応課長だし、実務を抱えているのは変だよな。その上4月からは九州大学工学研究科の学生で、いくら何でも3足の草鞋はきついよな。」と、不平をたらたら並べるものの、研究成果があがるわけでもなく、ただ時間が過ぎて行くばかり。出発予定の8月1日は、どんどん近づいてくる。

7月13日(月)。少し焦りが出てきた頃、岸先生からmail。「8月2日にみんな集まって、夕食会を開きましょう。」とのご案内。いたってのんびりムード。岸先生にとっては、アメリカに行って国際学会で発表するというのは、ごく日常的な行動なんでしょうね。mailの宛先をよくよく見ると、関根先生(山口大学工学部助教授)のaddressがある。知り合いが一人でも増えると、少し安心した気分になる。

21日(火)。もうこれ以上のんびりとはして

いられない。発表原稿とOHPの作成に取りかかる。当然、田中君と李氏にhelp me。ただし、李氏とはtelやmailでのやりとりのため、なかなかお互いの意志が通じないのがもどかしい。

31日(金)。不満は多々あるものの、とにかく作業終了。発表のタイトルは、

「Water Quality Simulation in Hakata Bay with an Ecosystem Model」

水相と底相をリンクさせた水底質予測モデルを開発して博多湾に適用し、湾内の富栄養化特性について考察した内容である。ただ、フラックスの季節的な特徴まで踏み込めなかったのが、かえすがえすも残念。まあ、これは次の発表のネタにしよう。

8月1日(土)。いよいよ出発の日。大きなスーツケースがあるため、福岡空港までタクシーで行くことにする。が、通るタクシーは実車ばかり。十数分待って、やっと乗り込む。「こんなことなら安川タクシーを呼べば良かった。」と、反省するものの、楠田先生と待ち合わせをしている10時45分に、間に合うかどうかぎりぎりのところ。

運転手さんに急いでもらって、何とか1分遅れで到着。「このぐらいは誤差範囲ということにしておこう。」と、勝手に納得しながら、とにかく手続きを済ませ、12時15分の羽田行きに搭乗。羽田で昼食の後、14時50分発のリムジンバスで成田へ。

16時、成田空港到着。それにしてもターミナルビルがでかい。その広いフロアにいっぱい客。とくに若者が多い。そうです、学校は今夏休み中なんです。

搭乗手続き、出国手続きを済ませて、Chicago行きのUnited Airlinesに搭乗。話には聞いていたが、エコノミークラスの席は

狭い。11時間30分も窮屈な思いをするのかと想像しただけで、うんざりする。

17時45分離陸。すぐに夕食。アルコールは飲み放題なのだが、トイレに立てる状況ではないので、缶ビール1缶で我慢し、無理矢理寝ようと努力する。しかし、当然のことながら寝られない。12時近くになってやっとうつらうつらしてきた頃、突然真昼になる。到着地の時間に合わせるためという理屈は分かるが、やはり面食らう。

8月1日15時15分、Chicago Ohare空港5番ターミナル到着。アメリカでも有数の空港だけあって、馬鹿みたいに広い。無人運転の電車に乗って1番ターミナルに移動し、17時5分発のBaltimore行きに搭乗。所要時間1時間40分で、19時45分にBaltimore Washington空港に到着（Washington空港とは別）。アメリカの広さを実感する。楠田先生によれば、Baltimore空港は、日本で言えば佐賀空港のようなローカル空港と言うことだが、結構広い。タクシー乗り場に行くと、おじさんが「ダウンタウンまで\$18」と、わめいている。客待ちの1台に乗り込み、Omni Inner Harbor Hotelへ。Baltimore滞在中の住まいである。フロントで宿泊手続きを済ませ、隣のHilton Hotel & Towersに宿泊される楠田先生と別れる。

私は314号室に入る。15時間ぶりの一服はめちゃくちゃ旨い。余談だが、昔英語の時間に、この部屋番号はthree - one - fourと読むように教わった記憶がある。しかし、メイドのおねーさんは、three - fourteenと言っていた。

2日（日）、6時30分に起床。準備の時間は今日1日だけ。発表原稿を一生懸命読むが、なかなか頭に入らない。気が滅入ってきたの



Harborplace

で、昼前にHarborplaceに出かける。歩いて10分ほど。学会会場のConvention Centerは、すぐそば。聞くところによると、ベイサイドのモデルになった場所らしい（本当かどうか未確認）。なるほど、とうなずく雰囲気ではある。ベンチに腰掛けて眺めていると、カメラやビデオを持った集団や家族連れが、ひっきりなしに通り過ぎていく。日本の観光地と全く同じ光景。

13時、Hotelにもどる。発表用のOHPの確認をしていると、チョンボが見つかる。あれだけチェックしたはずなのに。仕方がないので、手書きで修正。

17時30分。Convention Centerに、ISEMに参加する日本人6人が集合。既に紹介した3人に加わったのは、橋本先生と山本君。橋本先生は、広島大学生物生産学部の助手で、現在九州大学の柳先生（応用力学研究所教授）の弟子だと自己紹介。これには、思わず吹き出してしまう。柳先生をご存じの方は、20歳若い柳先生を想像して下さい。それが橋本先生です。楠田先生も思いは同じらしく、「今のはジョークでしょ？」

と尋ねられたが、どうやら本当のことらしい。一方の山本君は、関根先生の教え子で、今年の4月に修士課程に入学し、現在は休学してNorth Cal. Univ.で勉強中とのこと。

岸先生の案内で、Little Italyにあるレス

トランに入る。1階でビールを飲んだ後、2階の席に案内される。まず、牡蠣とホタテ貝を食べ、いよいよ本日のスペシャルメニューの紹介。まるでカンツォーネを歌うかのごとく、3大テナーも真っ青な美声。一つ目は、ロブスターの★◎▽※∈⇔▽。二つ目は、ヒラメの≡∴の■&§。そして圧巻は、厚さ2インチハーフ、重さ26オンスのロブステーキ。紹介が終わった後、みんな思わず拍手。ウェイターも満足そう。

山本君は勇敢にもロブステーキを、関根先生はヒラメを、残りの4人はロブスターを注文。どれもボリューム満点。ヒラメは、1匹のサイズが想像できないほどぶ厚い。山本君は、早速730gの肉塊と格闘を始める。私も食べようとしたとき、岸先生の素っ頓狂な声。「アレ、両側に尻尾がある。」

なるほどよく見ると、2匹を舟の形に組んである。どうりで、身の量が多いはず。味も日本で食べるのと変わらない。支払いは、全部で\$350、チップを合わせて、きりのいいところで\$400。ワインも飲んだし、まあ、こんなもんな。山本君は、結局平らげることができず、持ち帰り用のboxをもらう。全部食べられずに残したものは持って帰る、というのは、アメリカではごく自然な行為みたい。

Convention Centerではmixerをやっているの、顔を出してみる。10ぐらいの学会が同時に開かれるため、予想以上に人が多い。「1000人ぐらいいるんですかね。」と、関根先生と話す。岸先生によると、一番多いのはESA (Ecological Society of America) の参加者で、ISEMはこの中の1割弱ぐらいだろうとのこと。驚いたことに、食べ物は無料だが、アルコールは有料らしい。となれば、長居をしてもしょうがないので、フルーツとク

ッキーだけ食べて、3人で帰ることにする。それにしても、明日は8時から学会が始まるというのに（日本にこんなに朝早くから開始される学会があるでしょうか）、遅くまでワイワイやって、アメリカ人というのはタフなのかな。

こうして、私のアメリカ滞在の実質第1日は終了。

3日(月)、6時起床。いよいよ発表の日。発表内容の最終確認をして、7時30分に会場に到着。橋本先生とOHPの動作確認をしていると、茶色のロン毛を無造作に束ねたおじさん登場。我々に握手を求めてくる。何と、Dr. Anthony Kingその人です。適当に相槌を打ちながら、ご挨拶。

8時。いよいよセッション開始。トップバッターは岸先生。その後橋本先生、関根先生と続いて、9時から私の出番。緊張で、ギャラリの顔がよく見えない。うまく口は回らないし、質疑の時には、in the near futureと言うべきところをrecentlyと言ったり、めちゃくちゃ。質問した人はキョトンとしている。でも、とにかく20分が過ぎ、発表終了。楠田先生からは「ごくろうさまでした。発音はなかなか良かったですよ。」と、ねぎらいの声をかけていただいたが、国内の発表のようにはいかず、さんざんな出来。「次回の発表までには、英語の力を大幅にアップしよう。」と、固く決意する（喉元すぎれば熱さ忘れる）。

17時、今日のセッション終了。橋本先生は、翌日の朝の便で日本に帰られるということで、

「いやー、時差ボケしに来たようなもんですよ。」

と言いながら fade out。お疲れさまでした。

「慰労を兼ねて、今日はカニでも食べましょ

うか。]

という楠田先生の提案に、一同異議なし。カニでは有名なPhillip's restaurantに出かける。行ってみると、店の前は長蛇の列。しかし、誰もほかの店にしようとは言わない。30分近く待たされて、やっと我々の順番。私はNeptune何とかという、カニとエビのセット（おまけにポテトやブロッコリ等がついている）を注文する。\$ 16.85。一緒にビールを5つ注文すると、ウェイトレスのおねーちゃんが怒った声で、山本君にIDカードを見せると言う。「日本人は若く見える、彼は23歳だ。」と言っても、全く信用しない。日本では、おかしいと思っても商売を優先するようだが、アメリカではそれはないみたい。それにしても、私には年相応に見える山本君だが、彼女には何歳に見えたのだろうか。

食事には満足して、hotelに引きあげる。終わった。とにかく終わった。14時間30分我慢していた煙草に火を付け、右手からゆらゆら上がる紫色の煙を見ながら、心底開放感にひたる。当然、左手にはBudweiser。この半年間、実務に追われ、予測モデルの論文を色々読み、本当に大変でした。でも、発表さえ終われば、もう後は何をしようこっちのものだ。とはいうものの、帰るのは8日。まだまる4日もある。それまで無事に過ごせるのかな？

4日（火）、6時30分起床。24時間前とうって変わってリラックスした気分。のんびりとコーヒーを飲んだ後、Convention Centerに出かける。EMERGYだEXERGYだとワアワアやっている（要はENERGYのことらしい）。Syracuse Universityの経済学者は漫談を始め、私にはよく分からなかったが、会場は笑いの渦。おもしろいのは、アメリカ勢対ヨーロッパ勢の戦い。ヨーロッパ勢が発表してい

ると、「20年前に同じような発表を聞いたな。」と、誰にも聞こえるような大声で独り言。さらに、「こんなのstella（微分方程式を解く汎用ツール）で簡単に解けるじゃないか。」と言うと、「stellaで解けるようなやわい問題じゃない。」と反論。ただし、みんな陽気。10年ほど前、日本の某学会で見たような陰湿な戦いではない。

昼食の時、

「せっかくだから、Major Leagueの試合を見ましようよ。」

と楠田先生が提案され、関根先生がチケットを手配されることになる。大リーグの試合なんて、2度と見るチャンスはないかもしれない。今夜が楽しみだ。Oriolesが遠征中でなければいいのだが。

午後のセッションは13時から開始。休憩時間、「学会も少し飽きてきたな。」と思いながらコーヒーを飲んでいると、

「水族館に行ってみませんか。」

という岸先生の声。楠田先生から割り引き入場券を頂いていたので、二つ返事でOK。ところが、行ってみるとこれまた長蛇の列。ちょうど団体客が到着したところらしい。先に第二次世界大戦の時の船を見ることにする。潜水艦、信号船等4隻を回って5\$。ほかは大したことはないが、潜水艦は興味深い。実戦で使われたものだからなおさら。信号船は、水族館のチケット売場の前に停泊している。デッキから何気なく見下ろすと、大道芸をやっている。それほどものではない。「これならピーターフランクルの方がずっとうまい。」と思いながら見ていると、

「ワー、すごい！」

という黄色い声。よく見ると、チケットを買う列の中に女子大生らしき4人組。

Baltimore で見かけた最初で最後の日本人。

行列が無くなった頃を見計らって、水族館に入る。生物に詳しい人から見れば興味深いかもしれないが（当然大西洋の生物が主）、私にとってはただのどかい水族館。広さ以外は日本の水族館と変わらない。イルカのショーも、電気ウナギの発電も、同じようにやっている。もう少し scientific な impact が欲しい。

再び学会会場に戻った後、17時に全員集合。関根先生は、見事チケットを get（外野指定席、\$ 9）。試合開始は19時35分。えらく半端な時間。それに日本より1時間以上遅い。それまで時間があるので、19時に再び集合することにして別れる。私は、煙草を買いに行くことにする。自動販売機は無いだろうと予想していたが、どこにも煙草が見えない。スーパーや雑貨屋を見てもどこにもない。意を決して、くわえ煙草で颯爽と歩いている黒人のねーちゃんに尋ねる（Baltimore は黒人が多いんです）。親切に教えてくれたが、その店に行っても煙草の姿はない。入り口に立っている、その店の主人らしい中国人に尋ねると、レジに置いてあるという。しかし、レジの付近に煙草は見えない。よく分からないまま、「ラッキーストライクが欲しい。」

と言うと、さっと出てきた。何と、客からは中が見えないレジの上の棚に入れてある。店の中を見渡しても分からないはず。しかし、やけに小さい。両切りのラッキーストライクだ。

「フィルターが付いたやつがいい。」

と言うと、そんな物は無いという。仕方がないので、それを4個頼むと、再び何と、何と \$ 9.20。つまり、1個 \$ 2.30。信じられないほど高い（この頃1 \$ は142円）。でも、しょ

うがないので購入。

19時。Convention Center に全員集合。Orioles の本拠地 Camden Yards Stadium までは歩いて5分。すぐそばに、ペープ・ルースの生家がある。記念に鉄人 Lipken（ついに連続試合出場記録が途絶えました）や Alomar の T シャツを買おうと思ったのだが、1枚 55 \$。冗談じゃない、1枚 8000 円の T シャツなんか買えるか。そんな高給取りじゃない。

席を確認した後、食事を買いに行く。しかし、予想通り私が喜んで食べる気になるような物はない。何とか食べられそうなビーフサンドイッチ（ハンバーガーのパンに、ローストビーフみたいなのを挟んだやつ、\$ 6.50）と、コーラ（\$ 3.50）を買って席に戻る。これで \$ 10。またまた unbelievable。腹が減っていたのでかぶりつく。しかし、まずい。我慢してさらにかぶりつくが、3口食べたところで give up。あとでカップヌードルのお世話になろう。

試合は Orioles がリードして、淡々と進む。が、6回頃から何やら熱気むんむん。Mussina が1人のランナーも出していない。7回も3者凡退。8回1アウトから、Beamon がショートの後方に小フライを打ち上げる。いわゆるポテンヒットが良く出るところ。しかし、レフトの Surhoff が猛然とダッシュして、地上すれすれでランニングキャッチ。球場内割れんばかりの拍手と歓声。「今世紀最後の完全試合に立ち会うかもしれない。」と話し始めた矢先、Catalonotto が初球を思い切り引っ張った打球は、ライト線を転々。Stand up double。結局試合は 4-0 で Orioles が勝ち、Mussina は 2 安打（9 回に Cruz にもヒットを打たれた）で完封。彼に惜しめない拍手が送られたことは、言うまでもない。翌日の新聞

には、「Mussina near - perfect」と出ていたが、扱いが小さいのが不満。地元なのに。

さて、ここで問題です。Oriolesの対戦相手はどこだったのでしょうか？

これに答えられたら、相当なMajor league freak。そうです、それはDetroit Tigers。ガリクソン（元巨人、18勝してTigersのエースになった）やフィルダー（元阪神、51本塁打して、久しぶりの50本と騒がれた）、バナザード（元ダイエー、打順はフィルダーの後の5番、守備は2塁）達がアメリカに戻った後活躍したチーム。もっとも、今はめちゃくちゃ弱い。

5日（水）、7時起床。少しだれてきた。hotelでじっとしていても仕方がないので、Convention Centerに出かける。少しでもhearingのトレーニングをしようとして一生懸命聞く。が、何を言っているのかよく分からなかったり、発表の内容はなんとか理解できるのだが、何をアピールしたいのか分からなかったり、hearingの力不足を再び痛感。ただ、日本と発表のスタンスが大きく違うことが印象的。日本ではOHPが中心で、それを説明するのに終始するが、彼らは自分の考えをアピールし、その補助道具としてOHPを使っている。中には、20分の発表で、OHPを5枚しか使わない人も。

午前のセッションが終わった後、「もうおもしろそうな発表はないし、午後は名所見物でもしましょうよ。」ということで、皆の意見がまとまる。関根先生のレンタカーに乗り込み、まず、B&O Railroad Museumにでかける。BはBaltimore、OはOhio。入場料は\$ 6.50。歴代の機関車や客車が展示してある。近年の蒸気機関車は、本当にでかい。D51がおもちゃみたい。

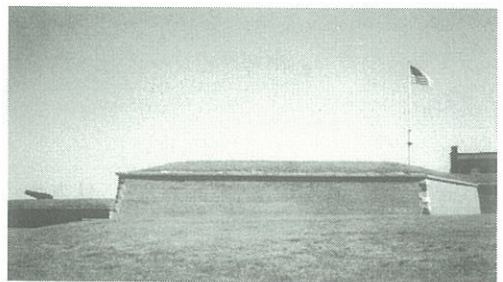
次は、Fort McHenry。ボルチモア戦争の時のアメリカの要塞。函館の五稜郭はこれをモデルにしたと聞いていたが、岸先生によると、参考にしたというよりも、ほとんどコピーらしい。

McDonald'sでハンバーガーとフライドポテトとコーラを買った後(\$ 4.25)、車中で食べながらEVERGREEN HOUSEに向かう。大富豪の邸宅。相当な日本びいきだったらしく、能面や印籠のすごいコレクション。これだけのものは日本にもないかもしれない。それに、とても個人の物とは思えないとんでもない数の蔵書に、2レーンのボーリング場。

19時、Harborplaceに戻って、自由行動。私は岸先生とPhillip's restaurantに再び行くことにする。「この前は、料理の選択を間違えた。今日はNeptuneを食べる。」と、岸先生は燃えておられる。私も当然右に倣え。ただし、今日のおまけはズッキーニにしてみる。最近日本でも見かけるようになってきたが、食べるのは初めて。が、大失敗。無難にプロッコリか豆を選択しておけば良かった。でも、岸先生はカニに満足そう。

先生はこの後Georgiaに行つて、何か発表されるとのことで、今日でお別れです。がんばって下さい。

6日（木）。今日は、Potomac Riverの自然観察会。早朝からWest Virginiaを目指し



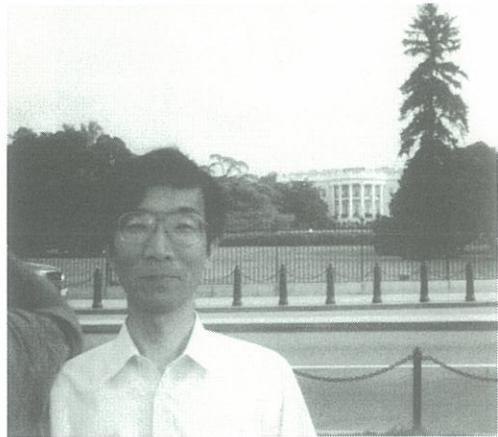
Fort McHenry

て高速道路を突っ走る。出口を間違えて、また高速に乗り直したりしながら。でも、通行料を取られないから気楽。10時30分目的地に到着。が、午前の部は既に出発した後。午後、3時の予定とのこと。仕方がないので、ドライブインのようなところで、パンやチーズを買い込み、河原で時間つぶし。ポーとしてパンをほおぼっていると、鉄橋を貨物列車が渡り始める。数えるともなく、貨車の数を数えていると、なんと82両(数え間違えていなければ)。でかい貨車が82両連結されています。日本だと、せいぜい30両ぐらい？

3時前に、再び目的地に戻る。ここは、Raftingの出発地点なのです。もちろん、RaftだけでなくCanoeもOK。費用は、1人\$50、4人で\$200。ガイド1人、軽食付き。距離は6マイル、所要時間4時間。つまり、平均時速たった1.5マイル。1時間ほど下って、この遅さに納得。急流は全体の5~10%、残りは一生懸命漕がないと進まないほどの穏やかな流れ。当然めちゃくちゃ疲れるので、30分に1回ぐらい休憩が入る。6時頃、食事。が、チキンとポテト。今日はどん兵衛のお世話になろう。明日は筋肉痛で、体がバリバリになりそう。でも、楽しい体験でした。

結局夕食はHarborplaceで。焼きめしみたいなのと、白身魚の唐揚げと、ポテト等で\$4.85。この白身魚の唐揚げが結構いけました。

7日(金)。アメリカ滞在最後の日。今日の予定は、首都ワシントンの見学。予定より5分遅れ、6時5分にホテルを3人で出発。高速に乗り、ワシントンへ。ところが、6時半には通勤の車で渋滞。夕方8時半までは明るいので、早く仕事を終えて遊ぼうという人が多いんでしょう。この渋滞は山本君が予想していたとおりで、ワシントンにも予定より5分遅れて7



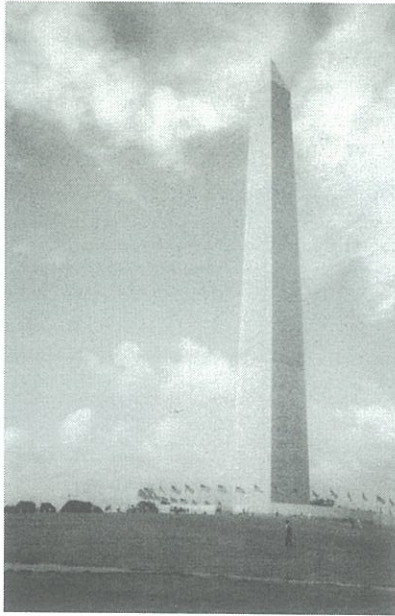
White House を背景に

時5分に到着。私は車を先に降り、Washington Monumentの入場整理券をもらう列に、山本君はWhite Houseの入場整理券をもらう列に並ぶ。関根先生は車を駐車場へ。Washington Monumentの方は10時の券を問題なくget。しかし、White Houseの方は長蛇の列らしい。整理券の枚数は5000枚(1人4枚まで)だが、結局10m前で終了したとのこと。予定通り6時に出発していれば…。White Houseに入ったからといって、どうってことないといえばそれまでだが、非常に残念。今日の目玉だったのに。

屋上でホットドッグとコーラを買って(\$4.50)朝食をとり、White Houseを背景に記念写真。屋上には、狙撃銃を抱えた兵士が4、5人、見張りをしている。

10時少し前に、Washington Monument(高さ555feet)の待合所へ。定刻にエレベーターまで案内され、70秒で、最上階の500-foot levelへ。White House, Pentagon, 議会堂等、合衆国政府の主要機関が一望できる。

次はHolocaust Memorial Museumに向かう。12時45分の入場券しか手に入らなかつ



Washington Monument

たので、先に National Museum of American History に行くことにする。アメリカの歴史がここにあると言っても過言ではないほどの広さと、豊富な展示物。ジャンルも幅広い。まともに見ていたら1日あっても足りないが（とくに、説明文を読むのに時間がかかるから）、駆け足で1時間半ほどで通過。売店で、お土産を買う。Tシャツは\$ 12.50から\$ 18.95 ぐらい。これなら私にも買える。

12時半に集合し、再び Holocaust Memorial Museum に向かう。入り口を入ると、空港と同じように金属探知器と X 線の検査がある。ネオナチ対策かもしれない。お土産を手荷物の方に置き、金属探知器をくぐると、ブー。空港なら持ち物のチェックが始まるが、ここではそんなものはない。ただ一言、「帰れ」。素直に、「失礼しました」と帰るわけにはいかない。ポケットにレンズ付きフィルムを入れていたのを思い出し、無事通過。ここも本当に広い。写真や映像をふんだんに

使って、Holocaust（ユダヤ人の大量虐殺）の現実を伝えている。映像の一部は、モニターを低い位置に置いて、高さ 1.5m 近い壁で囲み、小さい子供には見えないように配慮されている。

続いて、The National Air & Space Society に向かう。新旧様々な飛行機、宇宙船、月の石等が展示してあるが、それほど広くはない。レストランで遅い昼食。チーズバーガー、フライドポテト、クッキー、コーラで \$ 8.53。

今日の、というよりも今回の旅行の最後は、National Gallery of Art。学生時代に、大原美術館で開館から閉館まで絵画や彫刻を眺めていたことがあるが、ここはその比ではない。MET はもっとすごいんでしょうね。

驚いたことに、今日回ったところは、すべて入場料はタダ。真剣に見れば1週間ぐらいかかりそうな、すごい展示物なのに。しかも、歩いて回れる範囲内にある（少し、いや、相当疲れたけど）。

21時に Harborplace に戻って遅い夕食。ポテトとマッシュルームを注文するのだが（ポテトばかり食べてるって？だって、安心して食べられるんだもん。）、不思議なことにマッシュルームが通じない。Múshroom も、Mushróm もまるでだめ。5、6回言い直し、実物を指さしてやっと通じたが、何が悪かったのか全く不明。

広場では、毎日いろんなミュージシャンが演奏している。どの人も、とてもアマチュアとは思えないレベルだが、とくに今日の黒人4人組のアカペラはすごい。ギャラリもいつになく多い。地元では有名なグループかもしれない。

こうして、アメリカ最後の夜は更けていっ

た。

8日(土)。いよいよ帰国。早く帰りたいような、名残惜しいような複雑な気分。が、感傷に浸っている余裕はない。予定より10分早く、5時50分に空港へ向けて関根先生の車で出発。この10分が波乱の1日を演出すると、このときは知る由もなかった。

6時10分、Baltimore空港到着。関根先生は車をレンタカー屋に返し、徒歩で空港に戻られる予定。いつもジョギングをされてるし、距離は1マイルほどだから、30分も見ておけば十分だろう。楠田先生と私は、7時10分発のChicago行きの搭乗手続きをすませ、関根先生の帰りを待つ。ところが、40分になっても、50分になっても関根先生は戻られない。ついに楠田先生が、

「ぎりぎりまで待っても関根先生が戻られなければ、藤田さんは一人で帰って下さい。関根先生の荷物を預かっていますから、私は残ります。場所が分からない可能性もあるので、とりあえず別れて先生を待ちましょう。」

と言われ、楠田先生はカウンターの前で、私はターミナルビルの入り口で関根先生を待つことにする。しかし、姿は全然見えない。

7時3分。「もうこれ以上は待てない。仕方がない、一人で帰ろう。」と、決心したその時、

「藤田さ～ん。関根先生が戻られましたよ～。」

と言う楠田先生の声。が、声のする方を見ると、ブッチャーみたいなでかい黒人が私を手招きしている。

「黒人のプロレスラーに知り合いはいないぞ。」と思いながらよく見ると、通行人の間に楠田先生の姿が見え隠れしている。あわててダッシュ。関根先生とともに、3人でさらにダ

ッシュ。時間ぎりぎりまで飛行機に滑り込む。

「良かった。これで1人で帰らなくてすむ。」とほっとしながら関根先生に何うと、レンタカー屋への道が分からなくなり、あちこちの店で店員に聞いたが誰も知らない。諦めかけた時、たまたまその店に居合わせた客が教えてくれたとのこと。そのお客さんに心から感謝。

所要時間1時間50分で、8時Chicago着。United Airlinesの関空行きのカウンターに行くと、ケント・デリカットみたいなおじさんがいる。「Hello」と声をかけると、「毎度おおきに。」という日本語の返事。関西弁べらのおじさんで、航空会社も行き先を考えて人の配置をしているんですね。その彼の口から、思わぬ言葉が。

「皆さんラッキーですよ。ビジネスのシートです。」

この一言に、どれだけ感動したことか。地獄の13時間を覚悟していたのに、まさに地獄から天国です。9時30分発に搭乗。食べ物もエコノミーとは全然違うし、トイレを気にしなくてすむのでワインはがぶ飲み。シートも広いからゆったり気分で寝られるし。いや～、エコノミーに座っている人に悪いなあ～。

9日(日)、定刻の12時25分に関空着。ところが、預けた荷物が到着していない。私の名前で預けた関根先生の荷物も。UAの係員に聞くと、Baltimoreに置いてきたとのこと。ぎりぎりでも乗り込んだので、荷物を載せるのが間に合わなかったのかもしれない。何てこった。翌日の同じ便で到着し、宅急便で届けるということで渋々納得。無事スーツケースが戻ってくればいいのだが。一応、お土産も入っているし。もしかしたら、ビジネスに座れたのはこれと関係があるのかもしれない。当

然Chicagoでこのことは分かっていたはずなんだから。

しばらくロビーで待って、15時40分発の福岡行きに搭乗。16時45分福岡空港着。帰ってきた。やっと、帰ってきた。感動に体が震え…はしなかったけど、やっぱり日本がいい。福岡がいい。

「まず、寿司を食べて、それに、ラーメンもいいな。うまいステーキも悪くない。もう2度と外国なんか行くもんか。来年は、国内の国際学会を探してお茶を濁そう。」と考えながら、地下鉄への階段を下りていると、背後から楠田先生の乾いた声が耳朶に響いた。

「できたらでいいんですが、来年はEMECSで

発表していただけますか。トルコでありますから。」

あとがき

言い訳なんですけど、ISEMからもどって来てしばらくして、突然この記事を書くように言われました。このため、自分の行動に関するメモもなく、写真もほとんどありません。不十分な記事になりましたこと（もしかしたら記憶間違いもあるかも）を、お詫び申し上げます。

それと、心配していたスーツケースは、翌日無事戻ってきました。やれやれ。